

## スティーヴン・パウルス：スペクトラ

現代曲には、サイエンス用語をタイトルにしたものがよくみられる。たとえば、20世紀音楽の古典ともいえるヴァレーズの《イオニザシオン》は物理学で「電離」、すなわち物質が水に溶けてイオンに分かれることを指し、武満徹の《アステリズム》は天文学で「星群」を指す。そして本日演奏される《スペクトラ》も、よく耳にする言葉である。

「スペクトラ」とは、光をプリズムなどの分光器で分解し、波長の順に並べた「スペクトル」の複数形である。雨上がりの空にかかる虹は、空気中の水滴がプリズムとなって光が分解されることによって、赤から紫までの光のスペクトルが並んだものである。では、それがタイトルになった曲とはどんな音楽なのだろうか。

それを知る前に、作曲者について簡単にご紹介しておこう。スティーヴン・パウルスは1949年生まれのアメリカの作曲家。数多くの合唱曲をはじめ、ジェームス・ケインの原作による《郵便配達は2度ベルを鳴らす》をはじめとするオペラ、オーケストラ曲など400曲あまりにのぼる作品を残した人気作曲家だが、2014年10月に65年の生涯を閉じた。

小オーケストラのための《スペクトラ》は、パウルスがまだ30代初めの1980年2月に完成され、同年4月12日にヒューストン室内交響楽団によって初演された。スコアに記された作曲家自身のプログラムノートによれば、「スペクトラ」というタイトルは、色彩の配列のほかに楽想の連続やパターンも指す。そして曲はこの2つの要素、すなわち、オーケストラの色彩的な可能性と、多様で互いに関連づけられた楽想とによって特徴づけられ、第1楽章の素材が、追加や装飾をとめないながら曲全体に生かされているという。

第1楽章「エネルギーティコ（力強く）」は、冒頭のヴァイオリンの急速な上行のあと、チェロが下行してから上行する印象的な音型をはぎれよく奏する。この音型は全楽章を通じて、さまざまな楽器の音色で、また、拡大、縮小などにより形を変えながら、曲全体をまとめる役割を果たすことになる。クラリネットの独奏からそのまま曲は緩やかな第2楽章へと進み、クラリネットの柔らかな音色で前述の下がって上がる音型が奏される。ホルンの表情豊かな独奏も聴きどころである。第3楽章「アジタート（興奮して）」は、ティンパニと2群に分かれた打楽器群に導かれながら、音楽はクライマックスへと向かう。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。